



## 満員電車 第四回 漣

出てきたのは彼女本人。いつもの制服とは違つとも大入っぽいワンピースを身にまつた彼女に僕はどうきつとした。「来ると思うてたよ。思いがけない一言。彼女の顔にはいつもの暖かい笑顔がなかつた。「話があるの。近くの公園に行かない?」「うつむきながらの言葉。「うん。」

夕方の誰もいない公園のブランコに一人並んで座った。長い沈黙を破つたのは僕だった。「話して何?」「ブランコに座つてうつむいていた彼女は重い口を開いた。「午前七時三分。…何の時間が分かる?」「僕らがいつも乗る電車の時間と…母さんが死んだ時間。」「それとね…私が死ぬはずだった時間なんだよ。」僕は彼女の言葉に動揺を隠せなかつた。彼女はブランコから立ち上がり僕から少し離れた場所まで来て立ち止まつた。僕に顔を見せないように背を向けたまま…。

「五年前、修学旅行へ行くはずだったんだけど中止になつたの。人身事故が起つたから。駅のホームで並んで電車が転んで私のほうへ倒れ込んだ…。」彼女の肩が細かく震えている。

「でもね…担任の先生がかかるてくれた。こんな私をかばつてくれた!でもその代わり先生が…もう分かつたよ

ね。」「うん。」言葉が続かないなせだろう。「私、転校しようと思うの。親も納得してくれた。「なんで…?」僕は勢よく立ち上がつた。「やっぱり…気まずいじゃない?だから」「行くな!」「気が付いた時には自分の胸に彼女を閉じ込めていた。「好きだ:離れたくない。俺の為に離れると言つてるんだつたら離れないで…」「…先生が最後に言つてた言葉があるの。」「夕日のせいかいつもより顔が赤い彼女と向かい合つ体勢になつた。「母さん、なんて言つてたの?」僕が問い合わせると彼女は僕の背中に腕を回した。「幸せになつて…つて。小さな声で。」彼女を伝つた。「ごめんなさい…」「何で謝るの?」「だって、私が…」「ありがとう…生きててくれて。おかげで母さんの願いが分かつたよ。」次々と彼女の目から涙が零れ落ちる。まるで溜め込んでいたものが溢れ出すかのようだ。

「美華の幸せって何?」「…いたい…美華と一緒にいたい。離れてたくない。」僕の背中に回してある腕が、一層力強く締め付けてきた。それに答えるように強く抱き返し「うん。」と返事をした。

その後、しいて話もしないで公園で別れた。――「また明日」の一言を残して――いつもの満員電車で――

完

## 神様のアシアト 第四回 「ぶうん…。」

あまりにも暑くてイラライラしてゐるのか、もしくは、ク

ラスの奴らがうるさくてイラシたせいか、よくわからなかつたけど、いつもよりさらに気力がぬけた返事をかえした。

「しのちゃんも怖いと思わない?上野さんち、あたしんちの近くじゃん。あー襲われたらどうしよう。」

と杏奈が言つてゐる間に、授業の終わりをつげる電子音の鐘が流れ、「はい、授業は終わりです。」

と先生が言うと、ワツと叫んで男子の半数はランドセルをつかんで勢いよく走り出していった。教室はあつという間に静かになり遠くのセミの声がはつきりと聞こえてきた。

夏の生あたつかい風にあたりながら、私は「ふう」とため息をついた。

せっかく埋まつた私の心は、退院したと同時にまたぼつかりと空いてしまつた。春から冬へ戻つてしまふ様に、再び頭の中は学校への不安で一杯になつた。

「先生にもお礼を言うのよ」

そんな私の心の内を解つていいの?か、それとも解らなければ…?上野さんち、あたしんちの近くじゃん。あー襲われたらどうしよう。」

と杏奈が言つてゐる間に、授業の終わりをつげる電子音の鐘が流れ、「はい、授業は終わりです。」

と先生が言うと、ワツと叫んで男子の半数はランドセルをつかんで勢いよく走り出していった。教室はあつという間に静かになり遠くのセミの声がはつきりと聞こえてきた。

夏の生あたつかい風にあたりながら、私は「ふう」とため息をついた。

「やつぱりお母さん…」

少し歩いて振り返つた頃には、母の姿はどこにも無かつた。

「やつぱりお母さん…」

学校に行かせた。

「やつぱりお母さん…」

少し歩いて振り返つた頃には、母の姿はどこ